



鈴木三重吉著

古事記物語



小山書店版
生活百科刊行会

古事記物語

昭和29年1月25日 印刷
昭和29年1月31日 発行

定価 250円

著 者 鈴木三重吉
すずき みつる きち

発行者 小山 瑠 璃

本文印刷 弘済印刷株式会社

製 本 株式会社小原製本所

発行所 有限会社 生活百科刊行会

東京都千代田区富士見町2の12
電話九段(33)6006 振替東京180934

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

古^こ
事^じ
記^き
物^{もの}
語^{がたり}
目^{もく}
次^じ

女神の死……………	一
天の岩屋……………	七
八俣の大蛇……………	三
むかでの室、へびの室……………	五
きじのお使……………	五
笠沙のお宮……………	七
満潮の玉、干潮の玉……………	九
八咫鳥……………	二
赤い盾、黒い盾……………	三

おしの皇子^{みこ}……………一四二

白い鳥^{とり}……………一五九

赤い玉^{たま}……………一六七

宇治の渡し^{わた}……………一九七

難波^{なにわ}のお宮^{みや}……………二二五

大鈴小鈴^{お、すこす}……………二四二

しかの群^{むれ}、ししの群^{むれ}……………二五七

とんぼのお歌^{うた}……………二六九

うし飼^{かひ}、うま飼^{かひ}……………二八三

岩 波 文 庫

30-105-1

宇 治 拾 遺 物 語

上 卷

渡 辺 綱 也 校 訂



岩 波 書 店

それからまたお二人、その次には男神女神とお二人ずつ、八人の神さまが、つぎつぎにお生れになつた後に、伊弉諾神と伊弉冉神とおつしやる男神女神がお生れになりました。

天御中主神はこのお二方の神さまをお召しになつて、

「あの、ふわふわしている地を固めて、日本の國を作りあげよ。」
とおつしやつて、りつばな矛を一ふりお授けになりました。

それでお二人は、さつそく、天の浮橋と言う、雲の中に浮んでいる橋の上へお出ましになつて、いただいた矛でもつて、下の、ところろしているところをかきまわして、さつとお引きあげになりますと、その矛の刃先についた潮水が、ぼたぼたと下へおちて、それが固まつて一つの小さな島になりました。

お二人はその島へおりていらしつて、そこへ御殿をたててお住いになりました。そして、まず一ばんさきに淡路島をおこしらえになり、それから伊予、讃岐、阿波、土

佐とつづいた四國の島と、その次には隱岐の島、それから、そのじぶん筑紫と言つた今の九州と、壱岐、對馬、佐渡の三つの島をお作りになりました。そして、一ばんしまいに、とかげの形をした、一ばん大きな本州をおこしらえになつて、それに大日本豊秋津島と言うお名前をおつけになりました。

これで、淡路の島からかぞえて、すつかりで八つの島が出来ました。ですから一ばんはじめには、日本のことを、大八島國と呼びまたの名を豊葦原水穗國とも称えていました。

こうして、いよいよ國が出来あがつたので、お二人は、こんどはおおぜいの神さまをお産みになりました。それと一しよに、風の神や、海の神や、山の神、野の神、川の神、火の神をもお産みになりました。ところがおいたわしいことには、伊弉冉神は、そのおしまいの火の神をお生みになるときに、お体におやけどをなすつて、そのためにとうとうおかくれになりました。

伊弉諾神は、

「ああ、わが妻の神よ、あの一人の子ゆえに、大事なお前をなくするとは。」とおつしやつて、それはそれはたいそうお嘆きになりました。そして、お涙のうちに、やつと、女神のおなきがらを、出雲の國と伯耆の國とのさかいにある比婆の山にお葬りになりました。

女神は、そこから、黄泉の國と言う、死んだ人の行くまづくらな國へたつておしまいになりました。

伊弉諾神は、そのあとで、さつそく十拳の劍と言う長い劍を引きぬいて、女神の災のもとになつた火の神を、一うちに斬り殺しておしまいになりました。

しかし、神のおくやしきはそんなことではおいえになるはずありませんでした。神は、どうかしてもう一度、女神に会いたくおぼしめして、とうとうそのあとを追つて、まづくらな黄泉の國までお出かけになりました。

女神はむろん、もうとつくに、黄泉の神の御殿に着いていらつしやいました。

すると、そこへ、夫の神が、はるばるたずねておいでになつたので、女神は急いで戸口へお出迎えになりました。

伊弉諾神は、まつくらな中から、女神をお呼びかけになつて、

「いとしきわが妻の女神よ。お前と一しよに作る國が、まだ出来あがらないでいる。

どうぞもう一度帰つてくれ。」とおつしやいました。すると女神は、残念そうに、

「それならば、もつと早く迎えにいらしつて下さいませばよいものを。私はもはや、

この國のけがれた火で炊いたものを食べましたから、もう二度とあちらへ帰ることは出来ません。しかし、せつかくおいで下さいましたのですから、ともかく一應黄泉の神たちに相談をして見ましよう。どうぞその間は、どんなことがありましても、け

つして私の姿を御覽にならないで下さいましな。後生でございますから。」と、女神はかたくそう申しあげておいて、御殿の奥へおはいりになりました。

伊弉諾神は永い間戸口にじつと待つていらつしやいました。しかし、女神は、それなり、いつまでたつても出ていらつしやいません。伊弉諾神は、しまいには、もう待ちどおしくてたまらなくなつて、とうとう、左のびんのくしをおぬきになり、その片はしの、大齒を一本欠き取つて、それへ火をともして、わずかにやみの中をてらしながら、足さぐりに、御殿の中深くはいつておいでになりました。

そうすると、御殿の一ばん奥に、女神は寢ていらつしやいました。そのお姿をあかりで御覽になりますと、お体中は、もうすつかりべとべとに腐りくずれていて、臭い臭いいやなおいが、ぷんぷん鼻へきました。そして、そのべとべとに腐つた体中にはうじがうようよとたかつておりました。それから、頭と、胸と、お腹と、両もと、両手両足のところには、そのけがれから生れた雷神が一人ずつ、すべてで八人で、

怖おそろしい顔かおをしてうすくまつておりました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、そのありさまを御覽ごらんになると、びつくりなすつて、怖おそろしさのあまりに、急いそいで逃げ出だしておしまになりました。

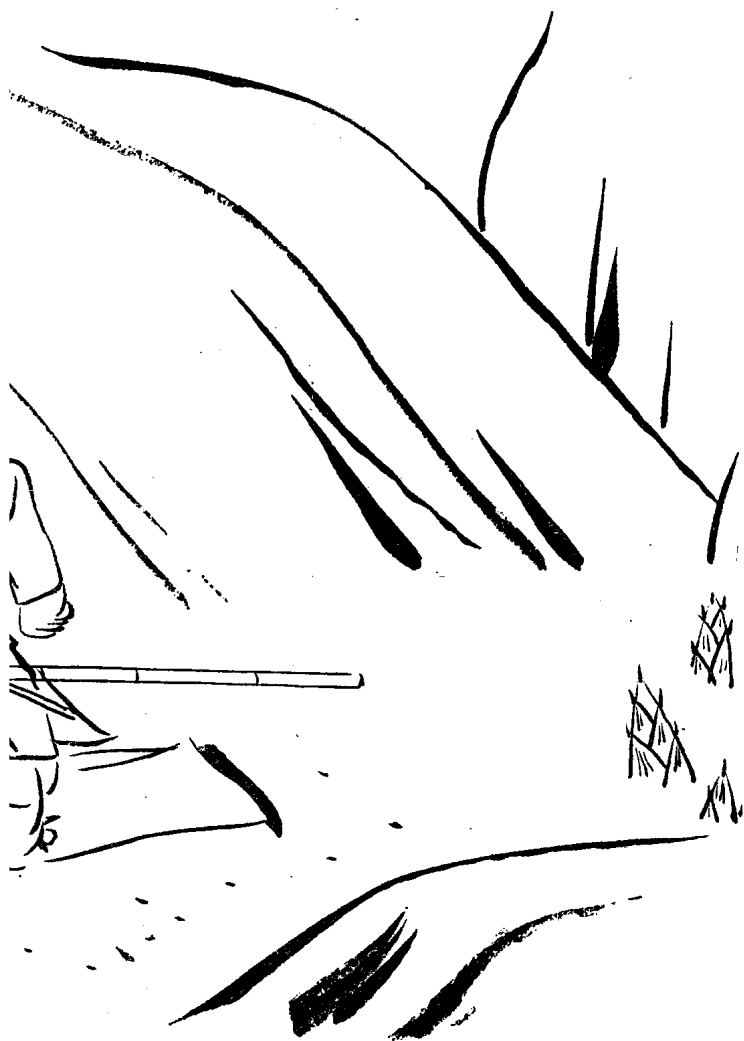
女神めがみはむつくと起きあがつて、

「おや、あれほどお止め申もうしておいたのに、とうとう私わたくしのこの姿すがたを御覽ごらんになりましたね。まあ、何なんと言う憎にくいお方かたでしょう。人ひとにひどい恥はじをおかかせになった。ああ、くやしい。」と、それはそれはひどくお怒いかりになつて、さつそく女おんなの惡鬼わるおにたちを呼よんで、「さあ、早くはや、あの神かみをつかまえておいで。」と齒はがみをしなからお言いいつけになりました。

女おんなの惡鬼わるおにたちは、

「おのれ、待まて。」と言いいながら、どんどん追おつかけて行ゆきました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、その鬼おにどもにつかまつてはたいへんだとおぼしめして、走はしりながら髪かみ





の飾りにさしてある黒いかつらの葉を抜き取つては、どんどんうしろへお投げつけになりました。

そうすると、見る見るうちに、そのかつらの葉の落ちたところへ、ぶどうの実がふさふさとなりました。女鬼どもは、いきなりそのぶどうを取つて食べはじめました。

神はその間に、一しようけんめいにかけて出して、やつと少しばかり逃げ延びたとお思ひになりますと、女鬼どもは、まもなく、またじきうしろまで追いつめて來ました。

神は、

「おや、これはいけない。」とお思ひになつて、こんどは、右のびんのくしをぬいて、その齒を引つ欠いては投げつけ引つ欠いては投げつけなさいました。そうすると、そのくしの齒が片はしからたけのこになつてゆきました。

女鬼たちはそのたけのこを見ると、またさつそく引き抜いて、もぐもぐ食べ出ししました。

伊弉諾神は、そのすきをねらつて、こんどこそは、大分向うまでお逃げになりました。そしてもうこれなら大丈夫だろうとおぼしめして、ひよいとうしろを振りむいて御覽になりますと、意外にも、こんどはさつきの女神のまわりにいた八人の雷神どもが、千五百人の鬼の軍勢を引きつれて、死物ぐるいでおつかけて来るではありませんか。

神はそれを御覽になると、あわてて十拳の劍を抜きはなして、それでもつてうしろをぐんぐん切りまわしながら、それこそ一しようけんめいにお逃げになりました。そして、ようよう、この世界と黄泉の國との境になつてゐる、黄泉比良坂と言う坂の下まで逃げ延びていらつしやいました。

三

すると、その坂の下にはももの木が一本ありました。